

# 「文章指導書」における記述の比較検討

古 本 裕 子

## 1 はじめに

本研究は、文章の書き方を扱った文献の記述を調査し、そこに書かれている内容の共通点と相違点を検討する。なお、ここでは文章の書き方を扱った文献を「文章指導書」と総称する。

「文章指導書」は非常に多い(中村 1995 P.13)。しかも次々と新しい本が出版されている。このことから、上手な文章を書きたい人が多いこと、上手な文章を書けない人が多いということが分かる。さらに、「文章指導書」の内容がそれぞれ違っていることから、決定版と呼べるものがないことも推測される。

なぜ多くの「文章指導書」が出版されるのかという理由は次のようなことがあげられる。時代によって求められる文章が違うため、よい文章の書き方が変わる。また、いろいろな種類の文章ニーズもある。そこで、それぞれ執筆者の職業や対象者が違う「文章指導書」が書かれることになる。その内容を見ると、いろいろな経歴を持つ筆者の経験や主観に基づいて書かれており、内容に違いがある。

それぞれに特徴ある「文章指導書」であるが、それらに共通する内容を見つけることができれば、それはいい文章を書くための客観的な基準の一つと考えてよいだろう。また記述が違っているとしたら、その理由を検討するとともに、どれが正しいのかを明らかにしなければならない。

筆者らは、この研究に先立ち国立大学の専門教員 157 人に対して、学生の日本語力に満足しているかどうかを調査した(古本ら, 2006)。「論文を書く」力は、文系・理系いずれも、指導教員の約半数が日本人学生の力を「不満」と感じていた。さらに、専門教員に対するインタビューを通じて正しい日本語で、内容を客観的に伝える文章を書く力が不足していることが分かった。そこで、同じ大学の工学部で大学生の書いたグラフを説明する作文の文章を分析すると(古本ら, 2005)、基礎力の不足と、彼らに不足している項目が明らかになった。

本研究で得られた結果は、大学生の基礎力の不足を補うような教材を開発する際に、扱うべき項目と、その教え方を知る手がかりの一つとなるだろう。なお、本研究では、上記のような文章を書くための基礎的な力を問題としているため、文学作品を書くというような希望を持つ人を対象とした「文章指導書」については、分析の対象としない。

## 2 先行研究

数多く出された「文章指導書」について中村(1995)は、その書名が内容を表していることが多いとし、次のような分類をしている。著名な小説家が書いた「文章読本」、評論家や学者が書いた「文章作法」、いろいろな種類の著者による文章の「作り方」、「書き方」、「文章表現入門」、「文

章表現の技術」、および大学教授らの書いた「文章表現法」などである。

斎藤 (2002) は明治から現代に渡る『文章読本』と呼ばれるジャンルの作品を数多く分析している。これらは、「文章指導書」を書く著者たちの文章に対する考え方、姿勢を分析しているもので、文章の書き方の技術について、細かく検討したものではない。

### 3 研究の方法

斎藤 (2002) によれば、「文章指導書」は「表現の文章」<sup>1</sup>を書く目的と、「伝達の文章」を書く目的で書かれたものがある。ここでは、文学などを扱ったものではなく、実用的な文章つまり「伝達の文章」を扱う。今までに出されている「文章指導書」の中で、よく使用されているものを取り上げ、書かれている内容を調べる。同一筆者の著作がある場合は、後に出版されたものを参考にする。

### 4 結果と考察

「文章指導書」について、①その対象、②目標とする文章、③構成についての記述、④文末表現についての記述を検討する。

#### 4.1 「文章指導書」の対象

現在、出版されている多くの「文法指導書」は、対象とする読者の違いによって、次のように分けられた。例を示す。

##### (1) 一般社会人向け、文章を書くための技術指導本

成人した学習者、一般社会人および大学生が実用の文章がうまく書けるようになる「文章指導書」である。本多 (1982) のようにロングセラーになっているものや、野口 (2002) のようにベストセラーになっているものもある。この種の本が次々と出版されるのは文章がうまくなりたというニーズが強いことを伺わせる。

##### (2) 大学受験の小論文対策のための本

樋口 (1999) は大学受験の小論文の対策として多くの著作をし、一つの文章構成の仕方に習熟することによって、どんな人でも小論文が書けるようになると主張している。このグループの「文章指導書」は文章の書き方以上に、いろいろな社会問題についての考え方を示して、小論文の内容を充実させる工夫をしているのが特徴である。

##### (3) 大学生のレポート・論文指導のための指導書

木下 (1881)・若林 (2001) のような理工系の学生のためのレポート指導の書が多く出版されている。これは、理工系の学生は特に文章力が低いため、その力を向上させるための「文章指導書」が必要になること、また、理工系のレポート・論文は型が決まっているので、マニュアル化するのが容易という理由が挙げられる。

##### (4) 大学の日本語表現法の授業の教科書

長沼ら (2003)・学習技術研究会 (2002)・清水ら (2003) などがあり、大学生活で必要になるいろいろな種類の文章の書き方について解説されている。

## 4.2 「文章指導書」が目標とする文章

4.1で挙げたような「文章指導書」が目標としている文章はどのようなものかを、主に著書の冒頭部分から調べた。4.1で挙げた「文章指導書」が対象としているのは一様ではないが、目標としている文章は似ている。

- 1) 木下 (1981) <sup>ii</sup>間違いなく相手に通じさせる文章。明快・簡潔な文章。
- 2) 本多 (1982) 読む側にとって分かりやすい文章。
- 3) 中村 (1995) 「良文」言語表現の技術面で特に問題のない文章。「達文」「良文」のうちの程度の高い部分、すっきりとしていてわかりやすい文章。
- 4) 樺島 (1999) 明快・平易で知的な文章。
- 5) 古郡 (1999) 分かる文章。
- 6) 清水ら (2003) 明確で論理的な文章。
- 7) 野内 (2003) 「自分の考えが正確に読み手に伝わる」「わかりやすい」「読みやすい」文章。
- 8) 後藤 (2004) 「分かりやすく、正確な」文章。

多くの「文章指導書」が目標とするのは、正確でわかりやすい文章であることが分かる。清水ら (2003) の言う論理的な文章とは他の著者目標の「わかりやすい文章」という言葉には既に含意されていると考えるべきである。

一方、下に挙げた山田 (2001) 岩崎 (2001) と野口 (2002) は、上記の目標を達成した上で、読み手を説得するところまで範囲に入れている。文章は何らかの機能を持って書かれており、その機能を達成することが目標だとしている点が新しい。

- 9) 山田 (2001) 「書いたもので、読み手の心を動かし、状況を切り開き、望む結果を出すこと」ができる文章。
- 10) 岩崎 (2001) 「事実・状況を具体的・客観的に伝える。自分の考えを正しく伝え、読み手に受け入れさせる」文章。
- 11) 野口 (2002) 「読者を説得し、自分の主張を広める。ためになり、面白く、わかりやすい」文章。

## 4.3 文章の構成

文章の構成についての、記述は「文章指導書」によって違う。目的とする文章によって構成が違ってくるのは当然のことである。しかし、4.2で述べたように、ほとんどの「文章指導書」が正確でわかりやすい文章を目標としているのにもかかわらず、なぜこのような違いが出るのだろうか。これは、「文章指導書」のそれぞれの著者が既存のいろいろな「文章指導書」から影響を受けながら「文章指導書」を著しているからであると推測される。

### 4.3.1 「起承転結」

多くの指導書で、文章構成の部分に「起承転結」について触れられている。しかし、はっきりと「起承転結」を文章の構成法と捉え、そのように書くことを勧めているのは、ここでは古郡 (1999) だけである。

「起承転結」は漢詩の作り方であり、「エッセイで用いられる形式」(野口2002)で、「いかに読者に感動を与えるか」を重視した形式(野内2003)であるとして、多くの場合退けられている。「起承転結」が採用される場合が少ないのは、ここで取り上げられた「文章指導書」が文学的な表現を主体とする文章ではなく、伝達を重視した文章を扱っているためであろう。

しかし、樺島(1999)は、起承転結は「文章を四つの部分にはっきり区切って書かせる役割を果たすとともに、文脈に変化をつけることによって読み手を飽きさせず、内容に興行きを感じさせる」として、文章へ応用できると言う。また、『理系の作文技術』を著した木下(1981)は、「起承転結」が演説などに向いている形式としながらも、理系の「原著論文の伝統的な構成もこれに似たところがある。…古来うけつがれてきた組み立て方は、まさに起承転結の線に乗っている」と好意的に述べている。

#### 4.3.2 「問題提起・意見提示・展開・結論」

樋口(2003)は、受験に出題される小論文を書くための方法として、出された問題をイエス・ノーで答えられる問いに置き直すことと、次に示すような「型」どおりに書くことを勧める。清水ら(2003)もこの形式を採用している。

表1 樋口(1999 P.22)の方法の概略(要約は 筆者による)

問題提起	イエス・ノーの問題提起をする。用語の説明をする。
意見提示	イエス・ノーのどちらの立場をとるかの判断を示す。文は、「確かに～、しかし～」の形で書く。
展開	イエス・ノーの根拠を示す。説得力のある論で、相手を説き伏せる。
結論	全体を整理し、イエス・ノーを簡潔にまとめる。

#### 4.3.3 序論・本論・結論

野口(2002)や木下(1981)は、序論・本論・結論の3部構成を採用している。ただし、それぞれをさらに細かく分けることもできると言う。学術的な論文もこの応用形であるとしている。野口の解説によると、「序論は、『何が問題か』を述べる。本論は、分析と推論の展開をする。学術論文の場合には、仮説を提示し、それをデータによって検証するという形をとる。結論として、学術論文では結論をきちんと述べる必要がある。スペースが許せば、結論の含意、未解決の問題、扱わなかった問題、今後の課題を述べる(筆者による要約)」と言う。

#### 4.3.4 「意見の根拠となる事実」と「意見」

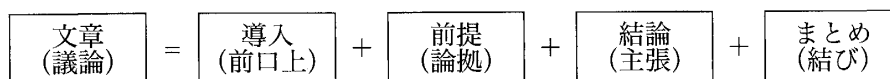
文章の構成要素として、「意見の根拠となる事実」と「意見」の二つを基本として認めるものである。文章検定試験を主宰している、樺島(1999)や岩崎(2001)、井上(2001)はこの形式を採用している。さらに、上記の2部形式の発展型として、次の二つの構成を提案している。

表2 「意見の根拠となる事実」と「意見」を基礎にした文章構成の発展型論説文

論説文	
1 意見の根拠となる事実を述べる	1 意見の根拠となる事実を述べる
2 テーマに対する意見を述べる	2 テーマに対する意見を述べる
3 意見の正しさを論証する	3 意見の正しさを論証する
	4 反論を想定し、それに反論する

野内 (2003) が提唱しているのはアリストテレスの時代からあるものという (図1)。しかし、これも論拠 (事実) と主張 (意見) を中心に考え、それに導入とまとめがついたものである。

図1 野内 (2003) の文章の構成



山田 (2001) は、上記の「論拠」と「意見」の前に「論点」を加えた型を提案している。論点とは、何について書くか、自分が取り上げた問題が何かを書く部分である。

先に挙げた樋口 (1999) の4部形式も、実は「意見」と「論拠」を中心に据えている。野内 (2003) ・山田 (2001) ・樋口 (1999) のいずれの構成も、「意見」と「論拠」の2部形式の応用と言える。

この形式で重要なことは、「意見の根拠となる事実」と「意見」のどちらを先に書くかによって、できあがった文章の印象が違うことである。従来日本語では意見は後に書くという場合が多かったが、西洋式を採用して意見を先に書くほうがわかりやすいとしたり、文章の種類によって書き分けるように主張しているものが多い (井上2001, 岩崎2001, 野村2003)。

#### 4.3.5 「頭括式」「尾括式」「双括式」

後藤 (2004) が挙げた文章の形式は、文章をまとめる位置によるものである。文章の最初にまとめが来る「頭括式」、文章の最後にまとめがある「尾括式」、最初と最後にまとめがある「双括式」である。まとめがなく、項目を列挙していく「列挙式」についても触れられている。

しかし、この構成法はまとめ部分の位置を示しているだけなので、他の構成法と矛盾なく共存することができる。また他の構成法で作られた文章も「頭括式」「尾括式」と言うことができる。

#### 4.4 文末表現

文末の表現について書かれている部分を見ると、次のような記述が見られる。1については多くの「文章指導書」が指摘しているものである。

- 1 文末の形式が、常体と敬体が混じってはいけぬ。(中村1995, 他)
- 2 同じ文末の形式が続くのはよくない。(本多1982, 中村1995, 野口2002)
- 3 体言止めはいけぬ。(本多1982)

筆者によって考え方が非常に違うのは、事実や意見を述べるときの文末に「と思う」「と考える」を使うかどうかである。「と思う」「と考える」を使った方がいいという意見と、使わない方がいいという意見に別れている。またそれらを受け身形にすることの是非も議論になっている。意見が分かれる理由は、この表現が断定をさけた言い方であると筆者が感じるかどうか、断定した表現を使わない方がいいかどうか、の2点にかかっている。このことに対する考え方が筆者によって違うために正しい表現についての基準が違っている。以下に、それぞれの筆者がこの問題について記述している部分を引用してその違いを示す。

#### 4.4.1 岩崎 (2001)

岩崎(2001 P.76)は文末形式を以下の表のように列挙している。岩崎によれば、「と思う」「と考える」は、事実をとりあげ、表現をやわらげる場合つまり婉曲的な文末表現である。また、確信の強さによって多くの文末表現が使い分けられるとしている。

表3 岩崎(2001 P.76)による文末形式 抜粋

<p>○婉曲表現                  ある事実をとりあげ、表現をやわらげる場合の文末表現                  ～ようだ・～だろう・～であろう・～ではないか・～と思う・～と考える・～ように思う                  断定まではしないが、確信がある場合の文末表現                  ～ではなかろうか・～ではないかと思う・～ではないかと考える・～とも考えられる                  はっきり断定することは避けるが、その判断が妥当であるとする場合の文末表現                  ～と考えてよさそうである・～といえよう・～と考えられよう                  確信を持って断定しているが、その表現を和らげる場合の文末表現                  ～といわざるをえない</p> <p>○結論を述べる文末表現                  ～という結論に達する・～という結論が得られる・～が明らかになった・～は明らかである・～が分かる・～が分かった・～と判断できる・～と判断できよう・～がうかがえる</p>
---

#### 4.4.2 木下 (1981)

木下(1981)は、「と思われる」「と考えられる」など受身形は逃げの余地がある文末でよくない、「私は～と思う」と書くのがよいとしている。

受け身形は「当否の最終的な判断を相手にゆだねて自分の考えをぼかした言い方である。理屈を言えば、ト思ワレルけれども自分はそうは思わない、ト考エラレルが自分の考えはちがうーという逃げの余地を残してあるわけだ。〈はっきり言い切る〉たてまえの文章では、こういうあいまいな、責任回避的な表現は避けて、『自分は・・・と思う』『・・・と考える』と書くべきである」としている。

#### 4.4.3 樺島 (1999)

樺島(1999)は、意見を表す部分では「と思う」をつけた方がよく、「べきだ」などの文末の主

張ではではつけない方がいいという。さらにそういう場合にも「私は～べきだと思う」にするといいという。

「自分の意見・感想を述べる場合、『このリンゴは味がよい』よりも、『私は、このリンゴを食べて味がよいと思った』の方が正確な情報を読み手に与える」という。その理由は、「味の好みは人によって異なるから、『・・・と思った』を加えることによって、このリンゴは味がよいことが、だれにも感じられる普遍的な事実ではなく、自分の感想であると言うことを示すことができるから」であるとしている。

ただし、「意見を主張する場合に『消費税は税率を引き下げるべきだと思う』というように『・・・思う』を付け加えると、「他人はそうは思わないかもしれないが、私はそう思う」「他人がどう思おうと自由であるが」というようさのニュアンスを持った主張として受け取られかねない。こういう場合は、「私は消費税は税率を引き下げるべきだと思う」というように主語をはっきりさせて書くように勧めている。

#### 4.4.4 後藤 (2004)

後藤 (2004) は意見を述べるときには断定してはならないと言っている。「意見を述べるときには、断定は避ける。様々な文章を見ていると、意見を述べている部分にもかかわらず、『断定』した表現が意外に多いことに気づきます。『断定』をすると、確かに何かははっきりしたような気もするし、ことばとしての切れ味も鋭いような錯覚を受けます。しかし、表現というものには、それなりの責任がついて回ることも忘れてはいけません」としている。

#### 4.4.5 野内 (2003)

野内 (2003) はこれまでの著者と全く反対に、「と思う」と言う必要はないと言う。

「文章を書き慣れない人の文章でめにつくのはやたらに『と思う』『と考える』がでてくることだ。はなはだしいのになるとすべての文章がこの表現で終わる。自分の意見を述べるのだからということだろうが、そんな必要はまったくない。文章を書くということはそもそも『自分の考え』を表明することなのだから『と思う』『と考える』といちいち断るまでもない。『何々だ』『何々である』と言い切れればよい。断定できないときには『だろう』とか『にちがいない』『かもしれない』『ではないか』とか言い換える工夫がほしい。

『思う』『考える』の連発が見苦しいのは文末が単調になることにもその理由がある。・・・これを避けるためには疑問形をつかってみたりする」としている。

#### 4.4.6 野口 (2002)

野口 (2002) も「逃げ」で終わる文を書かないようにといている。野口は先に挙げた木下 (1981) とは反対に「私はこう思う」は弱い、と感じているのである。

「『逃げ』の終わりは、自信のなさの表れであり、これが多いと、文章の迫力がなくなる。『～といわれている』は『私はこう考える』とする（『私はこう思う』では、少し弱くなる）」と書いている。

以上、文末の表現についてみてきたが、「～と思う」「～と考える」「～と思われる」「～と考えられる」について言えば、どの表現がいいかという基準が著者によって違い、全く定まっていないことが分かる。これらは、それぞれが対象としている文章の違いによるところも大きい。学術的な文章では、あいまいな文末は避ける必要がある。また、一般的な文章であれば、その基準は多少緩いものになるだろう。しかし、これは推測に過ぎない。いろいろな文章について、どのような文末が現れるか現れないか、また他の研究者や文章の書き手たちがどのように考えているのかを調査する必要があるだろう。

#### 4.5 その他

表現についての注意事項について、「文章指導書」の記述にどのような項目があるかを検討した。以下に多くあらわれていた項目を挙げる。

- 1) 表記の間違い(漢字表記などが間違っているもの・漢字と仮名の使い分け・句読点の打ち方(野口2002、大島ら2005)。
- 2) 話し言葉と書き言葉の使い分けができていない(木下1981、本多1982、岩崎2001)
- 3) 指示詞・指示語の指示するものがあいまいである(古郡1999、野口2002、後藤2004)
- 4) 接続表現が不適切である(若林2000、野口2002、後藤2004)
- 5) 文として必要な部分が欠けている(古郡1999、若林2000)
- 6) 主語・述語が呼応していないねじれ文になっている(木下1981、古郡1999、若林2000、野口2002、後藤2004、大島ら2005)
- 7) 主語と述語、修飾語と被修飾語の位置が離れている(本多1982、古郡1999、野口2002、後藤2004)
- 8) 文が長すぎる(木下1981、古郡1999、岩崎2001、野口2002、大島ら2005、後藤2004)

#### 5 まとめと今後の課題

以上、本研究では「文章指導書」を検討し、書かれている内容の共通点と相違点を検討し、次の点を見出した。

- (1) 対象別に分類すると、①一般社会人向け文章を書くための技術指導本 ②大学受験の小論文対策のための本 ③大学生のレポート・論文指導のための指導書 ④大学の日本語表現法の授業の教科書がある。
- (2) これらの多くの「文章指導書」の目標とする文章は、正確で分かりやすい文章であった。さらに相手を説得することまでを目標に入れているものもあった。
- (3) 文章の構成についての考え方は、著者によって違った。①「起承転結」 ②「問題提起・意見提示・展開・結論」 ③「意見の根拠となる事実」と「意見」 ④「頭括式」「尾括式」「双括式」などがあり、それぞれの基本型と、その発展型があった。
- (4) 文末表現は、①文末の形式が、常体と敬体が混じってはいけぬ。②同じ文末の形式



## 「文章指導書」における記述の比較検討

が続くのはよくない。という記述は共通に見られた。しかし、意見や事実を言うときに「と思う」「と思われる」などの形式を使うべきなのか否かということについては、筆者によって非常に意見が分かれ、定まっていない。

(5) その他に表現についての注意事項は、同じような項目が多く扱われていた。

今回は、よい文章を書くためのポイントとして「文章指導書」に書かれた記述を調べた。構成の仕方や文末は、筆者によって違っていた。そこで、今回の調査のように「文章指導書」の内容から著者たちの意識をさぐるだけではなく、実際の文章を調査し「よい文章とはどのようなものか」を分析していく必要がある。

## 6 参考文献

- 1) 古本裕子・苗田敏美・八重澤美知子：専門教育における留学生の日本語—日本人学生との比較を通じた分析—，金沢大学留学生センター紀要，9号，(2006, 投稿中)
- 2) 古本裕子・苗田敏美・八重澤美知子・川西琢也：工学を専門とする日本人学生が書いた文章に見られる基礎的な問題点，専門日本語教育研究，第7号，(2005)

### A 文章読本論

- 1) 斎藤美奈子：文章読本さん江 筑摩書房 (2002)
- 2) 中村明：悪文 —裏返し文章読本— ちくま新書 筑摩書房 (1995)

### B 一般社会人向け文章を書くための技術指導

- 1) 本多勝一：日本語の作文技術 朝日文庫，朝日新聞社 (1982)
- 2) 樺島忠夫：文章表現法 五つの法則による十の方策，角川選書 (1999)
- 3) 古郡延治：文章添削トレーニング—八つの原則，筑摩 (1999)
- 4) 山田ズーニー：伝わる・揺さぶる！文章を書く，PHP新書 (2001)
- 5) 井上章子：小論文の書き方，勉誠新書，勉誠出版 (2001)
- 6) 岩崎夏子：文章修行帖，勉誠新書，勉誠出版 (2001)
- 7) 野口悠紀雄：「超」文章法 伝えたいことをどう書くか，中公新書 (2002)
- 8) 野内良三：うまい！日本語を書く12の技術 生活人新書，NHK出版 (2003)
- 9) 後藤禎典：上手な文章を書きたい！社会人のための文章力トレーニング，光文社新書 (2004)

### C 受験のための小論文対策

- 1) 西研・森下育彦：「考える」ための小論文，ちくま新書，筑摩書房 (1997)
- 2) 樋口裕一：読み書き新聞小論文，学習研究社 (1999)
- 3) 樋口裕一・大原理志・山口雅敏：「型」書き小論文，学習研究社 (2003)

古 本 裕 子

D 大学生のレポート・論文用

- 1) 木下是雄：理科系の作文技術，中公新書，中央公論社，(1981)
- 2) 若林敦：理工系の日本語作文トレーニング，朝倉書店 (2000)
- 3) 大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂：ピアで学ぶ大学生の日本語表現 プロセス重視のレポート作成，ひつじ書房 (2005)

E 日本語表現法の教科書

- 1) 学習技術研究会／編著：知へのステップ，くろしお出版，(2002)
- 2) 長沼行太郎・青嶋康文・入部明子・向後千春・幸田国広・佐野正俊・傍嶋恵子・豊澤弘伸：日本語表現のレッスン，教育出版株式会社 (2003)
- 3) 清水明美・岩沢正子・加藤清・武田明子・福沢健：Practical 日本語 文章表現編－成功する型－，おうふう (2003)

注)

<sup>1</sup> 齋藤 (2002) によると、文章には主として「情報伝達」と「自己表現」の二つの目的があるという。その相違は次のようである。

表4 文章を書く目的に注目した文章の種類 齋藤 (2002)

	書く目的	読む目的	優先するもの	求められるもの	例
伝達の文章	情報伝達	情報入手	伝達内容 (情報)	的確さ	会社に提出するレポート
表現の文章	自己表現	鑑賞	伝達形式 (文章)	おもしろさ	社内報に書くエッセイ

<sup>ii</sup> 木下 (1981) は、理系の人が仕事のために書く文章で、他人に読んでもらうことを目的とするもの一だけを対象として取り上げている。